



## 山野辺 裕二

国立成育医療センター病院 医療情報室長  
(長崎大学医学部・歯学部附属病院 医療情報部より6月から異動)

### 【第5回】

## 幸せって相対的

私が9年前まで住んでいた住所に、財団法人放射線影響研究所(放影研)という施設から手紙が届いていました。今年の夏で、核兵器が最後に実戦使用されてから60年が経ちます。

### ●被爆二世

手紙の内容は、健康調査への協力依頼でした。放影研では原爆被爆者の子供(被爆二世)に対して、親の被爆による遺伝的影響があるかどうかを調べるためにさまざまな調査を行っています。ちなみに現在までの調査では遺伝的影響は証明されていないようです。

今回の調査は、中年以降になって生じる生活習慣病(高血圧や糖尿病など)の発症に関する臨床調査とのことで、被爆者の子供とそうでない人を含めて調査対象にしているそうです。

私の両親はともに被爆者(被爆者健康手帳を持っている人のこと)なので、私も「被爆二世」のひとりです。10年以上前には実際に放影研に向いて血液サンプルを提供したこともあります。世間では被爆二世であるために差別を受けたという話も聞かれますが、幸い私にはそのような経験はありません。

「被爆二世」というとなんとなくネガティブなイメージを抱きがちですが、今回あらためてよく考えてみると、「被爆二世でいられることはとても幸せなことではないのか」と思いました。被爆者というのは、「原爆の下で生き残った人」という意味です。それ以外の(亡くなられた)方の子孫はこの世に存在すらできなかったのですから。

### ●ヒバクシャ発生国の変遷

長崎大学では、以前から国内外の放射線被ばく者(ヒバクシャ)に対する医療に貢献してきました。最近では「永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター」という施設もできています。「ヒバクシャ」がカタカナになっているのは、世界中の被爆者と被曝者(漢字が違うことに注意してください)すべてを包含するという意味なのだろうと思っています。

海外から長崎へ留学してくる研究者の派遣元を見ていると、世界のヒバクシャの現状を垣間見ることができます。以前はチェルノブイリ原発事故の被害を受けたベラルーシや、旧ソ連時代の核実験場であったセミパラチンスクのあるカザフスタンからの研究者が目立ちましたが、最近ではイラクからの研究者も受け入れています。湾岸戦争やイラク戦争で使用された劣化ウラン弾と関連



映画「ヒバクシャー世界の終わりに」に登場するイラク南部バスラに住む少年(10歳)。白血病を治療中。写真・森住卓

があるようです。

ソ連と同じく核実験を繰り返し、イラクで劣化ウラン弾を使用したとされるアメリカ合衆国にもヒバクシャはいるはずですが、少なくとも私は米国から留学に来たという話を聞いたことがありません。しかし、冒頭の放影研は今でも日米両国の資金で運営されています。

戦後60年、日本では散発的な事故を除けば大規模な放射線被曝は起きていませんが、世界に目を転じてみると、今なおヒバクシャは発生し続けているのが現実です。

### ●水槽の中の魚

私の好きな「ルーマニア203」という作品の中で、白血病を患った小学生の男の子と、伝説のハッカーでもある少し年上の女の子が対話するシーンが出てきます。

男の子が「君は今、幸せなの？」と尋ねると、女の子は「幸せって相対的なものなのよ」と教えてくれます。「宇宙の果ての高等生物から見れば、私たちが水槽の中の魚みたいに可哀想な存在に見えるかもしれない」と。

骨髄移植しか助かる道がなく、適合するドナーも見つからない男の子は、「上を見ればきりがなくていいことか。でも、ぼくはぜひぶん下だよ、相対的には」と力なく笑います。

放影研からの手紙を読んでいて、このシーンを思い出しました。私が被爆二世であることや、日本がこの60年間はヒバクシャをほとんど出してないことは、確かに相対的には幸せなことなのかもしれません。でもそれは、そうでない人がたくさんいたことの裏返しであるとも解釈できます。

更には、写真で見る貧しい国の子供たちの笑顔と、夜遅くにバスや電車で出会う塾帰りの子供たちの顔つきを比べたりもしています。

1986年長崎大学卒業。形成外科の勤務医として九州、四国の病院に勤務後、96年長崎大学病院形成外科助手。99年に念願の医療情報部門へ転籍、2000年長崎大学病院医療情報部副部長。03-04年米国マウントサイナイメディカルセンター医療情報学研究員。05年6月より現職。専門は医療情報学と病院管理学。自称外来語研究者、医療ジャーナリズム評論家。

